

杖
名
稱

トテ聞得シ難所ノ大山ナレバ、イマダ殘ノ雪ニ木々ノ梢ヲ埋ミタリ。金山ヲ巳ノ刻ニ通リテ、午ノ刻ニハ有屋峠ノ雪路ヲ、手々ニカシキ權ヲハキテ、ヤウクト打越、八口内ノ谷ニ下リケル時、

○下
〔新撰字鏡〕金豆惠〔同木〕添他念反、去、於保豆惠

〔倭名類聚抄行旅具〕杖四聲字苑云、杖直兩反、上聲之、以竹木爲之、所以輔老人也、

〔箋注倭名類聚抄行旅具〕按、直屬澄母、舌音定母之輕、此云重不詳。中略按、北堂書鈔引殷允杖銘云、

翼德扶耆、易林云、鳩杖扶老、郭璞桃杖贊云、杖以扶危、儀禮喪服傳注云、杖所以扶病、則作扶似勝、說文、杖、持也、然則凡可持者、皆謂之杖、齒杖、兵杖是也、扶老亦杖之一端

〔事物紀原舟車帷帳〕杖

山海經曰、夸父與日爭走、道死、弃其杖、化爲鄧林、此已見杖矣、蓋起於此乎、大戴禮武王有杖銘、莊子有神農曝然放杖之文、

〔日本釋名下雜器〕杖、つくゑだなり、

〔倭訓栞前編十卷〕杖をいふ、衝居ツキスエの義成べし、二字の義、杖の用をいひ盡せり、古事記に御杖

を投棄給ふてなれる神を、衝立船戸神と名くと見ゆ、神代紀に所杖をつけりしとよめり、丈を訓ずるも杖より出たり、萬葉集に杖不足八尺と見えたり、中略まばりづゑあり、用がたに用う、杖ほどかゝる、子はなしといふ、諺は、節竹詩に、護假携持力多憑、替助功と見えたり、刑罰の杖を受るに

罪人に代り、其科を得て渡世するの風俗、清朝に見へたり、熱田に杖の舞あり、

○按ズルニ、刑罰ニ用キル杖ノ事ハ、法律部答杖刑篇ニ載セタリ、

〔古事記〕是以伊邪那岐大神詔、吾者到於伊那志許米、上志許米岐此九字、穢國而在祁理此二字、故吾者爲御身之禊、而到坐竺紫日向之橋小門之阿波岐、此三字、原而禊祓也、故於投棄御杖所成神名、

杖初見